「断捨離」

編集発行
大阪府立
北野高等学校
図書館

５月の連休中に、少々遅ればせながら流行の『断捨離』（やましたひでこ）を読みました。「断捨離」とは、もとはヨガの「断行・捨行・離行」という心の執着を手放すための教えに由来し、入ってくる不要・不適・不快なものを断ち、溜まったものを捨て、ものへの執着を捨てることにより、ゆとりのある快適な生活を送るということと述べてありました。

確かに私の身の回りにも不要なものがたくさんありそうです。それらを整理することで何か変わるかもしれないと思い、早速、次の日に「断捨離」をしてみることにしました。まず、私のパソコンにある大量のデータの「断捨離」を開始しました。ファイルの分類から始め、もう二度と使わないと思われる内容のファイルを消去し、フォルダをより効率的なものに作り変え、残ったファイルを分類・移動し、すっきりと分かりやすいものになるように整理していきました。メールやハードディスクの中も含めかなり大量のデータがあったのですが、意外にも半日程度で終了しました。おかげでパソコンも軽くなり、動作も軽快そのもので、何か私の心も軽くなったような気がして嬉しくなりました。これで味を占め、次に、山積みになった本の「断捨離」に取り掛かりました。ところが、これが大変なことになりました。

私の専門は物理なのですが、既に他界した国語の教師であった父親に小さい頃から無理やりに本を読まされていた影響で、いつしか読書の習慣が付いていて、雑読ですが、部屋にある本は結構な数になります。まず、パソコンの時と同様に本の分類から始めました。単行本・文庫本、小説・専門書・実用書・・・。分類しながら、残す本と捨てる（手放す）本に分けていきます。しかし、それが難しいのです。まだ読んでいない積読になっている本は当然捨てられません。また、教育関係や科学関係の専門書は、いつか使うかもしれないと思い手放す勇気が出ません。そこで、これには自分なりのルールが必要だと思い、残す本を決定するルール作りを始めました。

まだ読んでいない本は残す。何度も繰り返し読んだ本は、きっと良書に違いないと残す。読んで強く共感した、あるいは自分にとって気付きが得られた本は残す。自分にとって有益な情報であったり、新しい知識の吸収があった本は残す。本に強い思い出が付加されている場合は残す。これだけでもどれだけの本が「断捨離」できるのか、些か心配になってきます。けれども、ルールはルールと自分に言い聞かせながら取り掛かりました。

一冊一冊、目次を見て、中をぱらぱらと確認して分けていきます。ところが、ここに落とし穴がありました。ぱらぱらと見ているうちに、次第に読み始めてしまったのです。あっという間に時間が過ぎてしまいました。まったく本というものは、大変なパワーを持っています。結局、その日は予定していた五分の一程度の「断捨離」で終わってしまいました。ちなみに、読み始めてしまった本は、ビジネス書でありながら、激しい変化の時代における充実した生き方のヒントをくれる『７つの習慣』（スティーブン・Ｒ・コヴィー）という、元気が欲しいときに繰り返し読んだ４８１ページの本です。

次の日、午前中から本の「断捨離」の再開です。ルール通りに順調に進めていきます。途中、何度かその価格が高額であるが故に迷った場面が出てきましたが、ルールはルール、自分で納得させながら終了しました。私のルールで勝ち残った本の中から、お気に入りの本を２冊紹介します。まず、『理系思考』（元村有希子）。毎日新聞の科学環境部の記者で国語大好き・理科嫌いの筆者が、科学の面白さ・不思議さ・科学的なものの見方を伝えるコラムを担当したときの記事を中心に書き下ろしたもので、一気に楽しみながら読める本です。もう一冊はまだ新しい本ですが、『世界に勝てる！　日本発の科学技術』（志村幸雄）。現在、日本が技術力や産業競争力において置かれている隘路から脱出するための「サイエンス型イノベーション」について、日本の科学技術の歴史にも触れながら分かりやすくまとめ、これからの方向性を示唆してくれる本です。この２冊は、繰り返し読む気になる本だと思います。これで私の本の「断捨離」は一応終了です。これからは、図書館が私の書庫だと思い、しっかりと活用しようと思っています。

十代の聖画像 38

今を大切に

自分の歳がしっくりこない。昭和三十五年（西暦一九六〇年）生まれであるから満五〇歳だと人はいう。小学生の頃、五〇歳は「おっさん」だと思っていた。自分もやがてはそうなるのだと思いもせずに…。

訳もわからず通った幼稚園。遊びに行った小学校。クラブに夢中だった中学時代。数学に目覚めた高校時代。のびのび学んだ大学時代。気の向くままに研究した大学院時代。そして、いまも気の向くままに仕事をし、ランニングにはまっている。自分を『人よりこだわりが強い』と思うようになったのは最近のことだ。ひとつのことにのめり込むタイプだが、その対象は年齢とともに変わった。飽きっぽいのか切り替えが早いのかは自分には判らない。ただ、一貫して自分の周りには学校があった。小学生のときは夏休みもプールと図書室に通い、その利用度の高さゆえに表彰された。中学時代はクラブ活動のため毎日学校に通い、読書とは無縁になった。高校に入学し、数学のおもしろさに気づいてからの読書は、もっぱら知識欲を満たすためのものだった。クラブ活動に明け暮れ、成績がいまいちだったので、選んだ高校は北野高校のような進学校ではなかった。それでも大学は阪大理学部数学科と決めていた。深い意味などなく、憧れだった。結果的には現役で不合格となったことで、一浪して同じ阪大でも基礎工学部制御工学科に進学した。（制御工学科とは人工頭脳やロボティクスが主たる研究テーマで現在のシステム科学科である）

入って驚いたのは、第一志望でない不本意進学であることを明言し、そのことにいつまでもこだわる仲間の多いことだった。ある意味自分も第一志望でない進学だったが、納得した進学であったからそんな仲間の発言は甚だ耳障りだった。基礎工学部も理系の学部であるから、数学が出来ない者はいなかったが、好んで数学をやりたがる者もいなかった。おかげで研究室配属に際しても競合する相手はおらず、仲間からも、教授からも重宝がられ、快適な大学生活を送った。大学時代の後半の話である。

高校卒業まで、数学以外は嫌々勉強していた自分にとって、大学での講義は驚きの連続だった。大学生になって初めて国語や社会科がおもしろいと思った。一年生の時に時間割のコマを埋めるだけの目的で履修した国文学の授業が、それまでの国語のイメージを変えた。夏休みには阪大の図書館にない本を求めて、神戸大学の文学部図書館を利用させていただいた。小学生時代に図書室に通い続けた日々に戻った。ただ目的は読書のためでなく、文献をあさるためだった。東洋史学の授業では隋の煬帝と唐の太宗の比較だけで、半年間の講義を終えた。社会科でも特に歴史が嫌いだったが、その主な原因が登場人物の多さにあったから、これならいけると思った。二人の生き様を比較して見ていくと実におもしろかった。社会科にこんなおもしろさがあったんだと知り、理系を選んだことを後悔することさえあった。小学生時代から国語、社会科、体育の陸上競技が苦手で嫌いだったが、高校卒業後にそのすべてがひっくり返った。

いまになって思う。きっかけはどこにあるか判らない。現役で合格していたら全く別の道が開けていたかも知れない。正直なところ、数々のチャンスを自ら潰してきた。後悔することもあるが、少なくとも思いつく後悔はすべて、自分を過小評価したものだ。最大の後悔は大学院時代に海外の大学への就職を打診していただいたのを断ったことだが、その理由が実に馬鹿げている。知り合いにそんな人がいないので、イメージ出来ない、不安だというのがその理由だった。中学時代からそれほど勉強もしなかったのに、大学に残って研究することに憧れていたのだが、さすがに海外の大学となると尻込みした。

自戒の念を込めていう。臆することなかれ。やれるところまでやってみよ。そして、そのときそのときをしっかり生きよ。おかれた状況を受け入れ、前向きに生きることだ。若い君たちに、いまを充実した日々にするよう望みたい。私はいまも、これからも努力を続けていく。五〇歳という年齢であっても…「半世紀かあ」と思いつつ…人生半ばを過ぎてようやく高校までの学習の意義が判ったような気がする。

シリーズ　愛読書を読む　二六

ジャレド・ダイアモンド氏著、倉骨彰氏翻訳の本書は一九九八年度ピュリッツアー賞、同年度コスモス国際賞受賞作品である。三年生の英語の授業で、この本の内容に触れた英文を読む機会があり、興味を持った生徒も多いと思うので、是非さらにこの本を読んで、知的好奇心を広げてほしいと思う。

著者のジャレド・ダイアモンド氏は、医学部の教授であると同時に、著名な進化生物学者でもある。彼は鳥の進化の研究をするために、世界中で野外調査に従事し、特にニューギニアの内陸地で長年を現地の人々と共に過ごした。

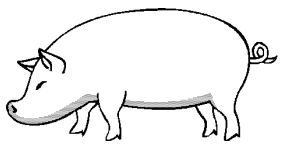
あるとき、ヤリというニューギニア人が博士にこう問いかけた。欧米人達は様々な物質を作り出してニューギニアに持ってきたが、ニューギニア人は何も作り出さなかった。その差はどこから生まれたのか、という素朴な疑問である。世界のある地域には工業化が進み、多様な物質文明を発展させ、人口の密集した社会が形成されている。一方、ニューギニアのように、つい数百年前まで石器に頼り、伝統的な生活を続けている社会もある。この当たり前に思われがちな事実に対する素朴な疑問に、様々な学問領域に通じた博士でさえも明快な答えを返すことができなかった。さらに、ニューギニアの人々と長年を過ごし、知能の点で彼らが何ら他の人種に比べて劣ることはないと痛感し、ますますヤリの投げかけた疑問は彼の中で大きくなってゆく。それから二十五年後、博士は、人類社会の歴史が大陸ごとに異なる経路をたどった要因と、それらの要因の因果関係を地球規模で科学的に究明し、本書を著した。これは、ヤリの問いかけに対する答えでもあった。

本書は次のような流れで謎解きを展開させる。今から一万三千年前、最終氷河期が終わった時点では、人類は世界各地で似たような狩猟採集生活をしていた。その後、各大陸はそれぞれに異なった経路をたどっていく。大陸ごとの差異が生じ、やがてその格差が大きく広がっていった。そして十六世紀には、南アメリカ大陸のインカ帝国をユーラシア大陸からやってきたスペイン人が征服するまでになった。なぜ逆にインカ帝国がスペインを征服することにならなかったのか。その直接の原因は、スペイン人が持ち込んだ「銃・病原菌・鉄」であった。これはよく指摘される点だが、博士はさらに考察をすすめる。なぜインカの人々は「銃・病原菌・鉄」をもっていなかったのか。持てるものと、持たざるもの、この両者を分かつ要因は何か。その要因はいつ、どこで生じたのか。このように問いかけつつ、様々な側面から事実を次々と紹介しながら、分析をすすめていく。

銃・病原菌・鉄
一万三千年にわたる人類史の謎

教授は次のように答える。人類の長い歴史が大陸ごとに異なるのは、居住した人々の能力が生まれつき異なっていたからではなく、大陸ごとに環境が異なっていたからであると。そして、大陸ごとの環境の差異を生じさせた重要な要因を三つ示唆する。

まず第一に、栽培化や家畜化可能な動植物の分布が大陸によって異なっていたことだ。特に南北アメリカは、これらの動植物が少なかった。これらの分布状況が重要なのは、家畜の利用や植物の栽培によって余剰作物の蓄積が可能になり、ひいては非生産者階級の専門職を養うゆとりを生み出したからだ。その結果、人口が密集した複雑な社会が形成され、技術面、政治面、軍事面の有利につながった。



第二の要因は、技術や文化の伝搬や拡散を大陸ごとに大きく異ならしめた要因である。この速度が最も速かったのはユーラシア大陸で、生態環境や地形上の障壁が他の大陸より少なかった。またこの大陸が東西方向に伸びる陸塊であり、緯度の違いによって作物や家畜の育成が阻害されることが少なかった。南北アメリカでは、逆にこれらの要因によって、とりわけ伝搬に時間がかかったのだ。

第三の要因は、大陸の大きさや総人口の違いである。面積が大きな大陸や人口の多い大陸では、何かを発明する人、競合する社会の数が多く、技術の受け入れを促す社会的圧力もそれだけ高い。面積が最も大きく、競合する社会の数が最も多かったのはユーラシア大陸である。南北アメリカは面積こそ大きいが、地理的、環境的に南北に分断されていて、実際には連続性のない二つの小大陸として機能していた。

人種や生物学的な差異が、その歴史的発展の差異を生み出したという見解を持つ人もいる。しかし教授はこの点を完全に否定し、先に述べたように居住環境の差異によるものだとする点において本書は極めて注目を集めている。人種というデリケートな問題に対する先入観を、圧倒的な事実を基にした説得力ある論証で解きほぐし、新しい人類史観を私たちに示してくれる。

読書案内

梅棹忠夫　著
『千里ぐらし』（講談社）
914／U1／1

昨年七月、「知の巨人」の一人梅棹忠夫氏が九十歳で亡くなった。今年の三月から三か月間、彼が初代館長を勤めた国立民族学博物館（民博）で「ウメサオタダオ展」が開催された。私も春休みの一日を会場で過ごし、梅棹氏の偉業を改めて認識し、理解することができた。

私が『モゴール族探検記』（292－U－1）で初めて梅棹氏のことを知ったのは中学生の時、今から四十五年も前のことである。大学時代には、話題の書『文明の生態史観』（209－U3－1）や『知的生産の技術』（002－U2－1）をかじり、教員になってからは『日本三都論－東京・大阪・京都』（361－U1－5）などを授業の参考にしてきたが、彼の膨大な著作（「著作集」全22巻は残念ながら本校図書館にはない）のごく一部しか読んでこなかったことが、今になって悔やまれる。

『千里ぐらし』は、『千里眼』という同人雑誌などに掲載された随筆を集めたもの。梅棹氏は京大教授から民博の館長に転職する際に、生まれ育った洛北から千里ニュータウンに居を移し、千里ぐらしを始めた。民博創設の経緯や千里中央での生活、周辺の様子などが活写されている。千里の変貌を子供時代から、傍で観察してきた私にとって、梅棹氏の文章は親しみやすく、共感・納得できる点が多い。私の知らない千里も出てくるので興味深く読むことができた。なおこの本の二部以下は、氏が失明してから、口述筆記によって書かれたものである。

石牟礼道子　著
『苦海浄土』－三部作（河出書房新社）
908／S30／4

今年に入って、池澤夏樹個人編集「世界文学全集」第三集のうちの一冊として『苦海浄土（三部作）』が刊行された。（第一部『苦海浄土』第二部『神々の村』第三部『天の魚』）

第一部『苦海浄土　わが水俣病』が一九六九年に刊行された当初、水俣病を告発する社会派のノンフィクション作品として大きな反響を呼んだ。

しかし、作者自身は「この三部作は、我が民族が受けた希有の受難史を綴った書と受け止められるかも知れないが、私が描きたかったのは、海浜の民の生き方の純度と馥郁たる香りである」と言う。

池澤夏樹個人編集「世界文学全集」は全三十巻からなり、グラス、ピンチョン、フォークナーら世界文学の珠玉の作品が集められている。その中で日本の作品としてただ一つ石牟礼道子の作品がとられている。『苦海浄土』（三部作）は、まさに世界文学の傑作の一つとして選ばれているのである。そこに編者池澤夏樹の見識の高さが感じられる。

第一部は一九七二年に講談社で文庫化されて以来、多くの版を重ねている。私も二十代のころに読んで、その特異な文体に魅了されたことをおぼえている。しかし、今回、三部作としてまとめてこの作品を読むことで、作品の相貌が一変するのが感じられた。第一部を読んだことのある人も、初めての人も、是非この傑作を美しい装丁のこの本で読んでみてほしい。

乙一　著
『箱庭図書館』（集英社）
913／O2／2

「読者から募集した投稿作の中から乙一が独自の視点でリメイク対象作を選び、大胆にリメイクする企画」であるＷＥＢ文芸「RENZABURO」の読者参加企画「オツイチ小説再生工場」から生まれた作品集。リメイク前の投稿作はネット上に公開されているので、「ビフォー／アフター」を楽しむことができる。もちろん私は乙一の作品を読みたいのだから「アフター」を読んだのだが、その後で「ビフォー」を読んでみてあらためて作家の力量を思い知った。アイデアは面白いが平板な話が、「なんということでしょう」、匠の手により味のある物語に生まれ変わったのです。六篇の作品が収録されているのだが、私は最後の『ホワイト・ステップ』がお気に入り。「ビフォー」より「アフター」がどんなに奥行きのある作品になっているかは「ビフォー」「アフター」（もちろん「アフター」を先に読むべし）と「あとがき、あるいは『箱庭図書館』ができるまで」を読んでいただくことにして、この作品には乙一ワールドとも言うべき不思議な世界の中にホッコリとした情感が漂う。この話を読んだ後、なぜか「世にも奇妙な物語」のテーマ曲が頭の中に流れてきた。ところで、鬼才乙一のことだから投稿作ももしかして乙一自身の作品で、実は二つがセットになって一つの作品という仕掛けになっているのでは――などと考えるのは勘繰りすぎでしょうね。

高木仁三郎　著
『プルトニウムの恐怖』（岩波新書）
539／T4／1

いま思うと、大学一回生の秋は私の人生の転機だった。

学園祭の講演で、高木仁三郎さんに出会ったのである。本書が出版されて間もない頃のことである。

講演は、明快で非常に具体的なものだった。原子力発電が、非常に大きな問題を抱えた技術であることを、プルトニウム社会への疑問という大きな枠組みでとらえて、深い批判を語られた。自分の学んだ学問を、こういう形で社会へ還元する科学者がいることに感動を覚えた。

その日以来、私の大学生活は、さまざまな原発関連文献を読み漁るものになった。そして後には、大学という枠ではないが、個人的に知遇を得て、いろいろ教えてもらうこともできた。

人生の師に出会った始まりは、この一冊の本を読んだことだった。

高木さんは、一〇年ほど前に亡くなられた。その生涯は『市民科学者として生きる』という

自伝に詳しい。

高木さんの目には、現在の東京電力原発事故の事態が、起こってはならないがいつか起こるものとして、きっと映っていたに違いない。一九九五年に物理学会誌に書かれた論文「核施設と非常事態」は、まさに東京電力福島原発の今日の事態を予見している。

反原発の世界で身体を張って生きていた高木さんですが、化学者としての著作にも名著があります。『元素の小辞典』（岩波ジュニア新書）がそれです。これを受験勉強の友にする読書も渋くてよいと思います。

小島寛之　著
『文系のための数学教室』
（講談社現代新書）
（近日中に図書館に入ります）

数学は何の役にたつの？

今まで何度か遭遇した問いかけです。

私は私なりに数学が好きで、質問をした人の中でなんとか数学の地位を回復したいと、言葉で説明しようと試みますが、結果はあまりうまくいきません。

そうした中、この本を読んで、小島氏が述べている数学に関する認識が、今の私の認識をきれいに言葉にしてくれていると感じました。以下、本の内容を少し紹介します。

小島氏は哲学者ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』を援用します。非常に単純に言うと、『論理哲学論考』では〈世界〉について独我論的に考察しています。〈世界〉とは〈私〉の認識であり、その限界は〈言語〉である。つまり、〈言語〉で捉えられる射程、それが〈私〉の境界線である。

ここでいう〈言語〉とは私たちが普段、話したり、書いたりしている「ことば」に限るものではなく、もっと広いものを指しています。ウィトゲンシュタインは「論理空間の中にある事実が、すなわち世界である」といっています。つまり、〈論理〉こそを〈私〉の認識の限界を定める〈言語〉だとしています。

このように〈世界〉＝〈私〉を規定し、その境界線を〈論理〉＝〈言語〉で示したあと、ウィトゲンシュタインは、「語りえぬこと」について議論をします。たとえば、〈価値〉というものについて〈価値〉などというものを、〈私〉の内部にないもの、〈語りえぬもの〉、形而上的なものとしてしりぞけます。

ウィトゲンシュタインの考え方を借りるなら、数学も〈私〉の中にあると見なせます。しかも、数学は〈言語〉であるから、数学も〈世界〉＝〈私〉の境界線を規定する役割を担っているわけです。

重ねて言うなら、日本語、音楽、バドミントンも〈言語〉です。それぞれが〈世界〉を規定しているのです。

大切なのは、この数学はあらかじめ〈私〉に存在しているものであって、決して「このようにあるべき」などと規定されるものではない、ということです。私には私の数学があり、みんなにはみんなそれぞれに固有の数学があるのです。そこには善し悪しも優劣もありません。だから「数学が役に立つか、立たないか」などという議論は、非常に形而上的で、取るに足らないものなのです。

もちろん、数学の科学技術への貢献を否定するものではありません。しかし、それは数学が偶然備えもった性質のうちのごくわずかな部分に過ぎないのです。数学の本質は、人が人であることを規定する〈言語〉であることにあり、そこにおいては、価値や便宜性などを論じることは無意味なのです。

河合隼雄　著
『こころの処方箋』（新潮文庫）
１４０／Ｋ３／２

読書案内

「心の喪失」「心が見えない」時代と言われて久しい。人はいつの時代も迷い揺れる心とともに生きているのだろう。

この本は心の専門家―河合隼雄先生の悩める人々への処方箋である。「第一章　人の心などわかるはずがない」で始まり、五十五の「常識」がやさしく柔らかい言葉で綴られている。刺激されたり納得したりであっという間に読み進む。

一つの章の内容を紹介させていただく。「第二十一章　ものごとは努力によって解決しない」インドの宗教家クリシュナムルチの言葉である。自分の努力が報われない、認められない、努力しても解決の緒がみつからない、そんな思いに囚われる人は多い。

そもそも「努力すればうまくゆく」とは正しいことなのか？

「自分の努力が足りないからだ」「こんなに努力しているのに、××が悪いからだ」そんな思いで苦しみを倍加させている人も多い。また、「解決」の方に早く目がゆきすぎて、努力に腰がはいらないことも考えられる。

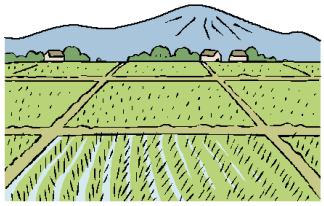
（だったらどうするの？努力は無駄？って思いますか？）先生はこう繋ぐ、「私は努力ぐらいしかすることがないのでやらせていただいている。」と。

われわれ凡人は努力を放棄して平静でなど居られない。解決などということは、しょせん、あちらから来るものだから、「目標」にせず、せいぜい努力でもさせて頂くというのがいいようである、と。

河合先生は偉大な学者であるが、どの章にも難しい言葉や解釈は見当たらない。分かる言葉が重み深みのある説得力を持って読む人を引き込む。

先生は最後にこの本のコンセプトである「常識」に触れ、常識を伝える機会（家庭や地域など）の減少を案じながら、

「まったく気の毒なことだが知識はたくさん持っていながら常識のない人が増えてきたのである。常識に縛られて生きるのもどうかと思うが常識のない人は不愉快である。・・・常識を知らぬ「非常識」はあまり好きになれない」と述べられた。



The Role of Books in Communication

If I could recommend only one book as an English teacher in Japan it would be "151 Common Mistakes of Japanese Students of English" by James H. M. Webb. This book is incredibly helpful to students and teachers alike. It addresses common errors and confusing grammatical points specific to Japanese learners of English. After borrowing my copy, a friend told me that he has been studying English for over a decade and this was one of the most helpful books he had come across.

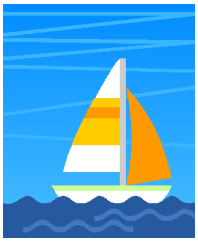
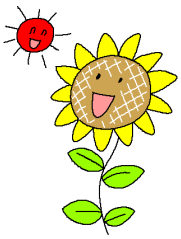
While grammar books are certainly useful for studying, simply drilling grammar points will not lead to proficiency in any language. Language is complex. It encompasses more than just words on paper. It also includes non-verbal cues. For example, expressions and body language can be just as telling, sometimes more so, than the words that are spoken. One of the challenges when learning a foreign language is to understand how these non-verbal cues can vary from one culture to the next. Familiarizing oneself with the complexities of another culture and its communication styles is as equally important as knowing how to correctly conjugate a verb.

Even when communicating in one's own language it is necessary to understand where the other person is coming from. Empathy is a skill that must be practiced and developed. Books, especially fiction novels, are invaluable tools for developing this skill. As psychoanalyst Phyllis LaPlante describes it, "when we read quality fiction, we are compelled to relate to the characters as whole persons, as complicated and contradictory human beings, likable or not, familiar or foreign."

Therefore, I suppose my true recommendation is to read as much as you can, and then put what you learn to practical use in your daily life. Do not overlook the value of fiction. It seems many people these days get so caught up in their work or studies that they consider reading fiction to be a purely recreational hobby, but it can be so much more. Expository texts are of course necessary and invaluable to our learning, but through fiction we are invited to experience the thoughts and feelings of others and in doing so we are able to enter a world other than our own.

My final piece of advice to anyone studying English is to not worry too much about making mistakes. There is a certain sincerity that often accompanies imperfection in language. Too much emphasis on politeness or formality when communicating in English can at times even appear cold and distant. With that in mind, don't stress about choosing the correct or most polite word. Use gestures or smiles, or anything to get your point across. Sometimes saying the wrong word with a smile can more accurately convey your feelings than saying the correct word without emotion.

In his poem Any Language, Much Less English, Taylor Mali explains to his students, "I care more about what you say, than the words you choose to say it. That said - that being said - and having said that, the message I want to impart is, I don't care if your commas are in the right place so long as I know that your heart is."

編集後記　日常生活のかけがえのなさは、日常が破られたときに痛切に感じるもののようです。東日本大震災から４ヶ月、原発事故の収束の見通しもいまだ見えません。しばらくは日常と非日常の間を生きるということになるのでしょうか。

図書館には原発関係の本も、地震や津波など自然災害に関する本もたくさんあります。内容は現在でも古くなっていませんので、ぜひ読んでみてほしいと思います。　（Q）